

## 第2章 日本の高校生の英語学習に対する 小中高での情意変化と動機づけ

清泉女子大学専任講師 長沼君主

### 1. はじめに

小学校における英語活動では「情意の育成」にまずは重きがおかれるが、そのようにして育成された「英語が好き」という感情は、その後の中学や高校での学習へどのような影響を与えるのだろうか。また、そのような感情は学習を進めていく中でどのように変化をしていくのであろうか。単なる情意の高低だけでない、動機づけの質的な分析も行いながら、情意とスキルの育成のバランスについて考えていきたい。

### 2. 小中高における情意的変化

#### 1) 小中高における能力層別にみた情意の変化

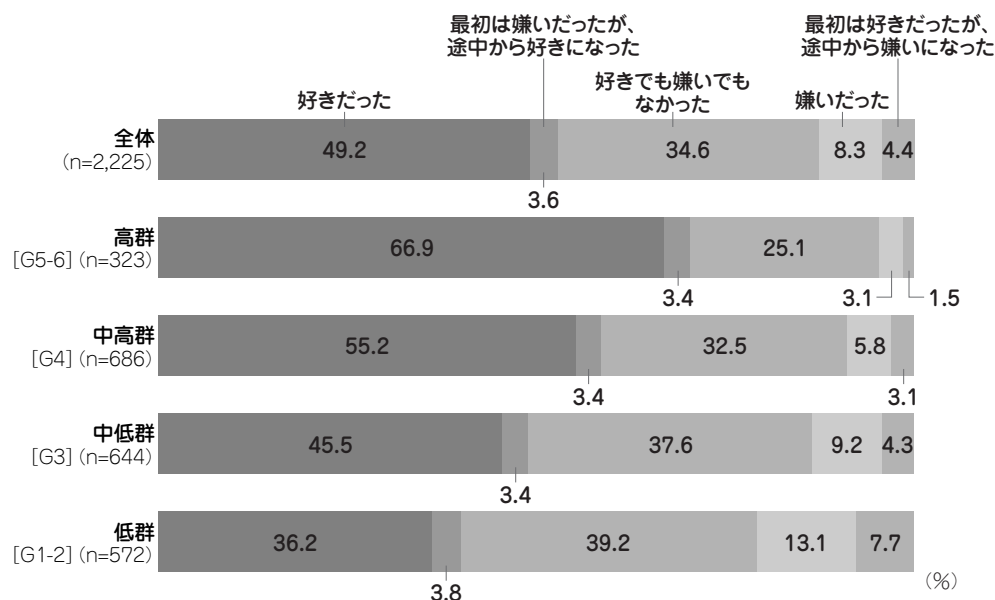
小中高の各段階において、英語を好きか、嫌いだけでなく、最初は好きだったが、途中で嫌いになったケースや、逆に最初は嫌いだったが、途中から好きになったケースなども含めて調査項目を設計し、振り返り調査を行った。高校時のGTEC for STUDENTSのトータル・グレードから、グレード1と2を「低群」、グレード3を「中低群」、グレード4を「中高群」、グレード5と6を「高群」とした上で、能力層ごとの情意的変化をみてみたい。

「小学生のときの英語学習は好きでしたか」の質問に対する回答とGTEC for STUDENTSトータル・グレードに基づく能力層とのクロス集計結果を図2-1に示す。全体的には52.8%と約半数の生徒が、「好きだった」または「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」と肯定的な回答をしている。能力層ごとにみても、肯定的な回答の割合は、高群では合わせて70.3%だったのが徐々に低下し、低群では40.0%となっている。一方、「嫌いだった」または「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」と否定的に回答している生徒は増加する傾向にあり、低群では20.8%となる。ただし、全体では12.7%とそれほど大きい数ではなく、小学生段階で英語に対して否定的な印象を持つ生徒は少ないと言える。

それではこのような情意的傾向は、中学生になるとどうであろうか。小学生以前に英語

## 日本の高校生の英語学習

図2-1 小学生段階での情意×能力層



\* 小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のうち、「小学生時の英語の好き嫌い」を回答した生徒のみ対象。

\* 無答不明は図から除いた(以下、図2-11まで同様)。

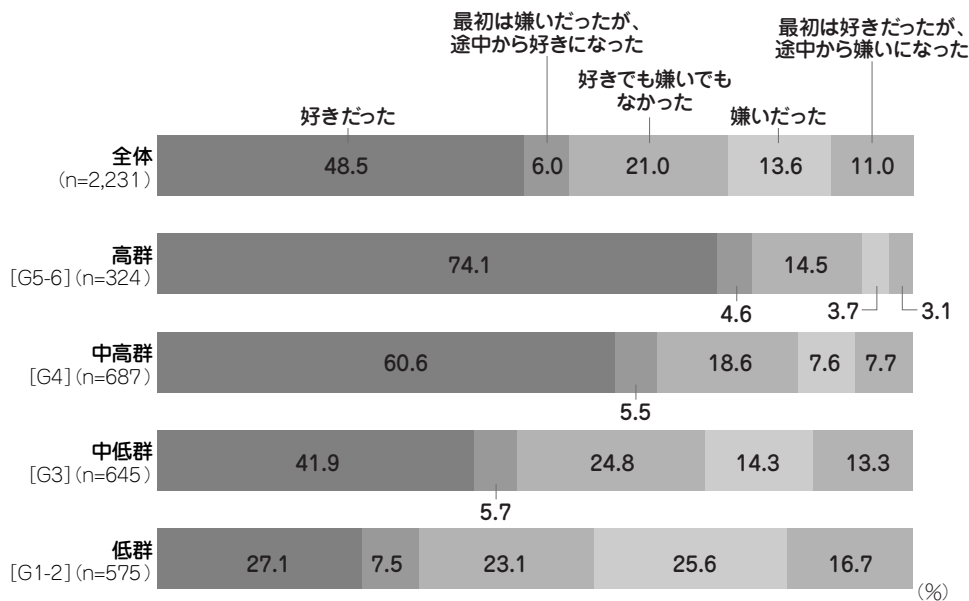
\* 能力層の「高群」とはGTEC for STUDENTSのトータル・グレードが5と6、「中高群」はトータル・グレードが4、「中低群」はトータル・グレードが3、「低群」はトータル・グレードが1と2の生徒(以下、図2-14まで同様)。

学習を経験していない生徒が約3分の1いることから、小学生以前に何らかの英語学習を経験した生徒(図2-2)と経験していない生徒(図2-3)とに分けてみる。

小学生以前に英語学習を経験した生徒では、全体で合わせて54.5%と約半数の生徒が肯定的な回答をしている点では、小学生時と変わらないものの、「好きでも嫌いでもなかった」と答えている層が少なくなり、その分、否定的な回答が24.6%へと上昇している点の特徴である。

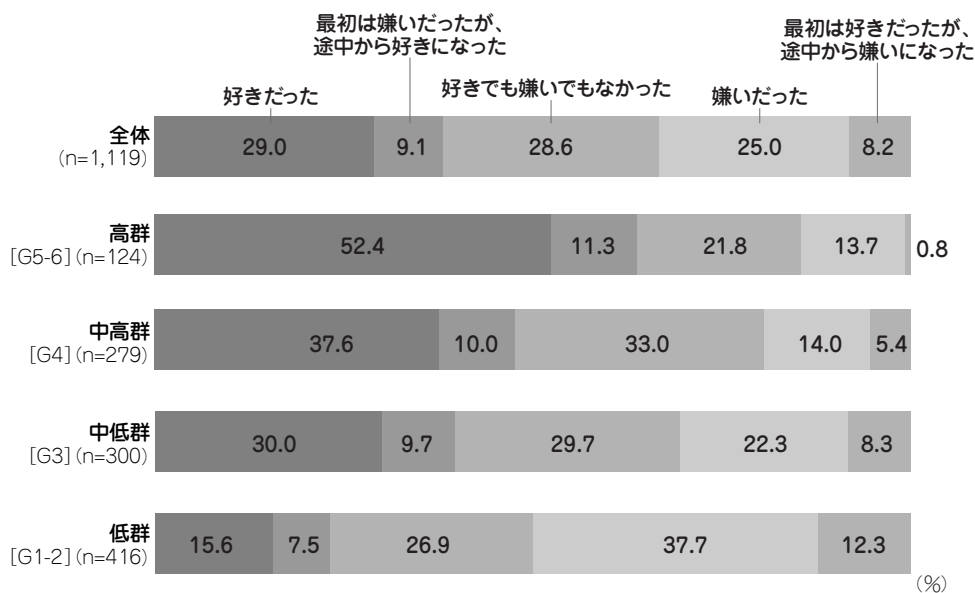
また、それに伴って高群から低群にかけての肯定的、否定的な回答の差が大きくなっており、高群では肯定的な回答が78.7%と、小学生段階から比べてさらに上昇しているのに対して、低群では逆に否定的な回答が42.3%と半数近くまで上昇している。ただし、その内の16.7%は「途中から嫌いになった」と回答している生徒であり、特に低群においていかに英語学習に対する肯定的な態度を保持し、嫌いにさせないことが重要であるかが示唆される。

図2-2 中学生段階での情意×能力層 [小学生以前の英語学習経験群]



\* 小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のうち、「中学生時の英語の好き嫌い」を回答した生徒のみ対象。

図2-3 中学生段階での情意×能力層 [小学生以前の英語学習非経験群]



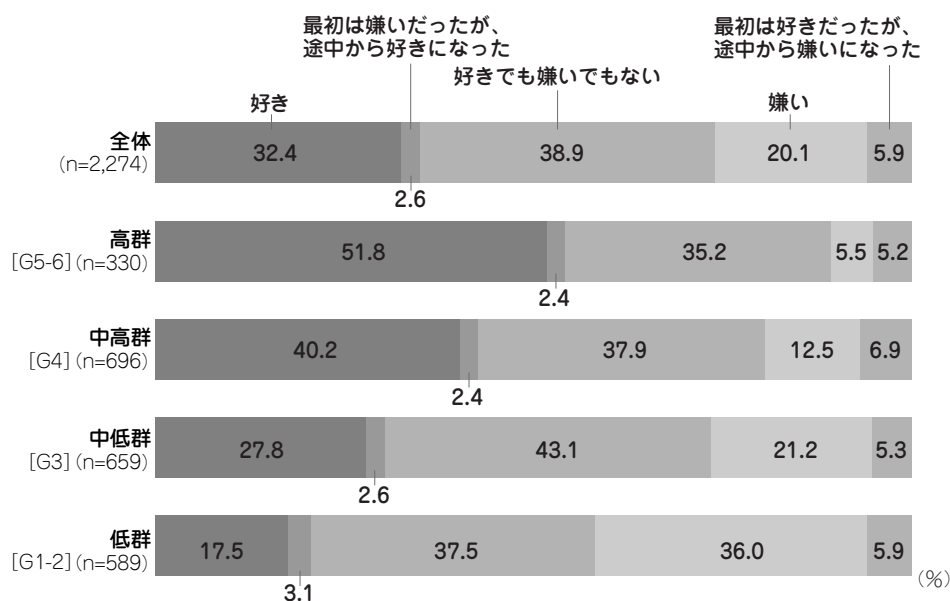
\* 小学生以前に英語学習を経験しなかったと回答した生徒のうち、「中学生時の英語の好き嫌い」を回答した生徒のみ対象。

## 日本の高校生の英語学習

これに対して、経験していない生徒では、全体で38.1%の生徒が肯定的な回答、33.2%の生徒が否定的な回答と、小学生以前に英語学習を経験した生徒と比べて、情意面での育成が難しいことがうかがえる。低群で否定的な回答が50.0%と半数を占めている一方で、高群でも14.5%と決して低い値ではなく、能力と関係なく情意的に低い層が一定の割合でみられることがわかる。他方で、「途中から好きになった」生徒も各能力群で10%前後は存在し、情意的に変化をしやすい時期であることもみて取れる。

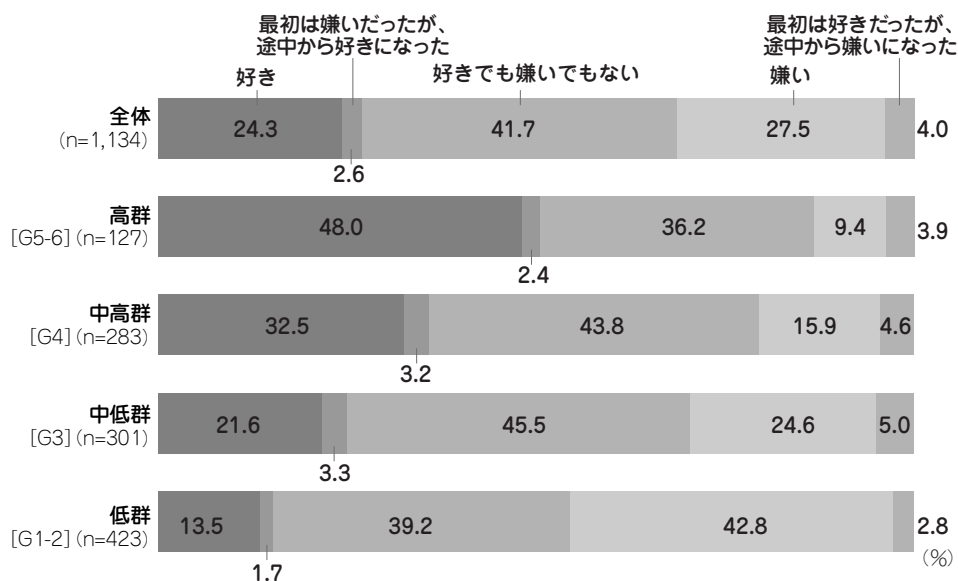
中学生段階と同様に高校生段階での回答も、小学生以前に英語学習を経験した生徒(図2-4)と経験していない生徒(図2-5)に分けてみる。経験した生徒では、全体では否定的な回答は中学校とほぼ変わらず26.0%と4分の1程度にとどまっているものの、肯定的な回答が35.0%と、約半数から3分の1程度へと低下している。実際、高群においても肯定的な回答は54.2%と半数程度、低群にいたっては20.6%と2割程度にまで落ちている。その分、「好きでも嫌いでもない」といった、判断を決めかねている中立的な回答が増加しており、このことが肯定よりだが積極的に好きというほどではないとの意味であるのか、積極的に嫌いともまではいかないという限りなく黒に近いグレーであるのかを、より深く探っていく必要がある。

図2-4 高校生段階での情意×能力層【小学生以前の英語学習経験群】



\* 小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のうち、「現在の英語の好き嫌い」を回答した生徒のみ対象。

図2-5 高校生段階での情意×能力層【小学生以前の英語学習非経験群】



\* 小学生以前に英語学習を経験しなかったと回答した生徒のうち、「現在の英語の好き嫌い」を回答した生徒のみ対象。

経験していない生徒では、肯定的な回答は26.9%、否定的な回答が31.5%と、中学生段階と比較して、経験群と同様に肯定的な回答が減り、「好きでも嫌いでもない」との回答が増えていることがわかる。また、経験の有無にかかわらず、中学生時と比べて肯定から否定、否定から肯定への途中での情意的変化の割合が少なく、情意的に一貫している。中学までの段階で肯定的な態度を育成し、高校に入った時点でそれを低下させず保持できるかが鍵であると言えよう。

## 2) 小学生時に育成された情意の保持と喪失

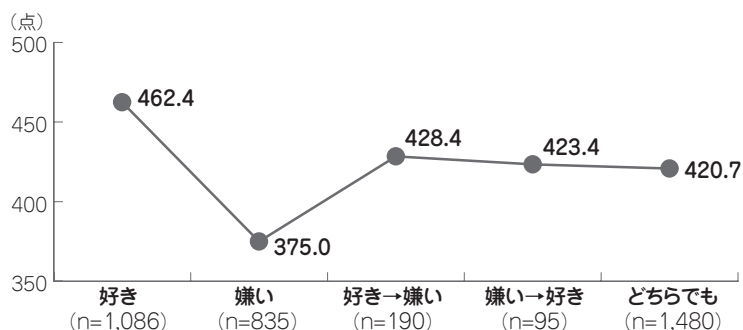
全体的な傾向として、小中高と段階を進むにつれて、英語が好きな生徒の割合が減少し、嫌いである割合が増える傾向にあるが、実際に小学生時に築いた英語学習への肯定的態度はどの時点で失われてしまっているのかを、もう少し詳しくみてみたい。小学生以前の段階で何らかの英語学習を経験した生徒に絞って、情意的変化の履歴をみる。

高校時の情意的変化とGTEC for STUDENTSのトータルスコアとの関係を見てみると(図2-6)、「好き」と答えた生徒で能力が高く、「嫌い」と答えた生徒では低い。それでは、「好きから嫌い」、または「嫌いから好き」に変化した生徒と、「好きでも嫌いでもない(以

## 日本の高校生の英語学習

降、どちらでもない」と答えた生徒ではというと、ちょうどその中間に位置し、それぞれで差があまりみられない結果となった。

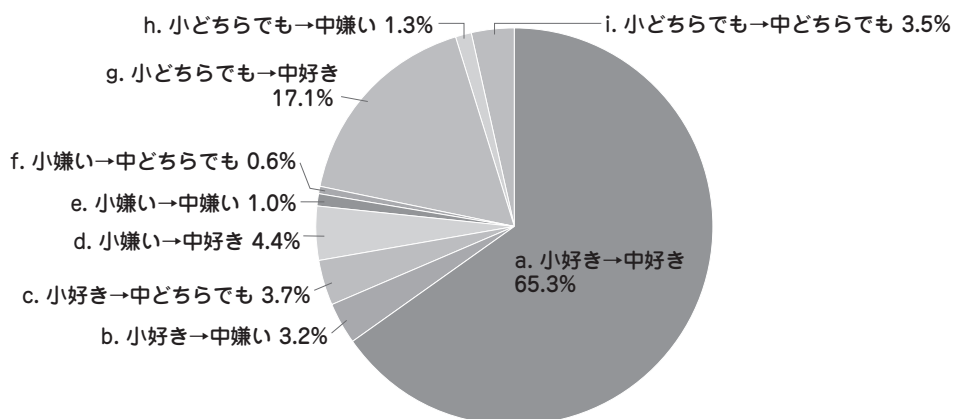
図2-6 高校生段階での情意×GTEC for STUDENTSトータルスコア



\* 「現在の英語の好き嫌い」の回答のうち、「好き→嫌い」は「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」、「嫌い→好き」は「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」、「どちらでもない」は「好きでも嫌いでもない」を示している。

このような全体の生徒での得点傾向を踏まえた上で、小学生以前の英語学習経験がある生徒について、高校入学までの情意的変化についてみると、図2-7にあるように、高校時に「好き」と回答した生徒のうち、72.2%は小学校時に英語が好きであった生徒(a,b,c)であることがわかる。また、これに中学になって英語が好きになった生徒(d,g)を加える

図2-7 高校時に英語学習が「好き」と答えた生徒の情意変化 (n=709)



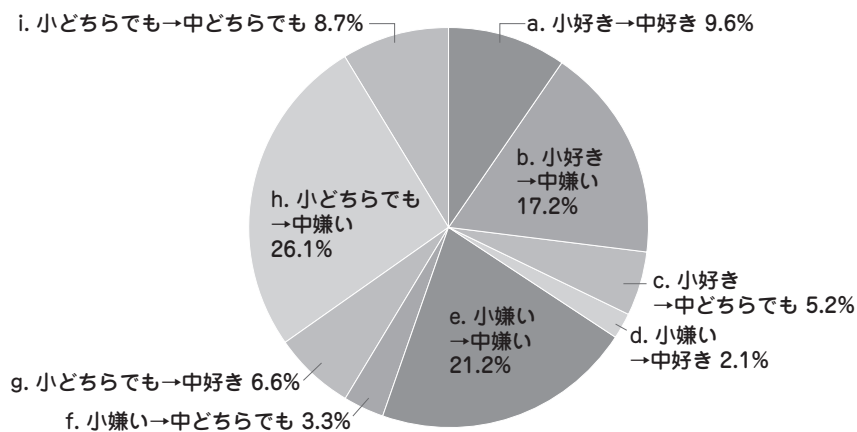
\* 小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のうち、「現在の英語の好き嫌い」を「好き」と回答した生徒のみ対象（小学生時または中学生時の好き嫌いが無答不明の場合を除く）。

\* 小中学生段階の好き嫌いは、「好き」は「好きだった」または「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」と回答した生徒。「嫌い」は「嫌いだった」または「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」と回答した生徒（以下、図2-11まで同様）。

と、小学生時もしくは中学生時のいずれかで英語が好きだった生徒の割合は93.7%となり、高校になって初めて英語を好きになる生徒の数が少ないことがわかる。

図2-8は逆に「嫌い」と回答した生徒の割合であるが、そのうち26.6%は小学生段階から英語が嫌いだった生徒(d,e,f)である。中には中学でいったん好きになる生徒もわずかながらいるが、結局は高校では「嫌い」と答えている。それに対して小中好きだったのに高校で嫌いとなった生徒(a)は9.6%と比較的少ない。一方、小学生の時は好きだったのに中学から嫌いになった生徒(b)は17.2%であり、小学生段階ではどちらでもないが、中学で嫌いになった生徒(h)26.1%を含めると、高校で嫌いと答えた生徒の約半数にあたる43.3%が、中学で情意的つまずきを覚えていることがわかる。これに小学生段階から嫌いだった生徒(e)を含めると64.5%となり、かなりの生徒が高校入学前に既に英語を嫌いとなってしまっていることも読み取れる。

図2-8 高校時に英語学習が「嫌い」と答えた生徒の情意変化 (n=425)

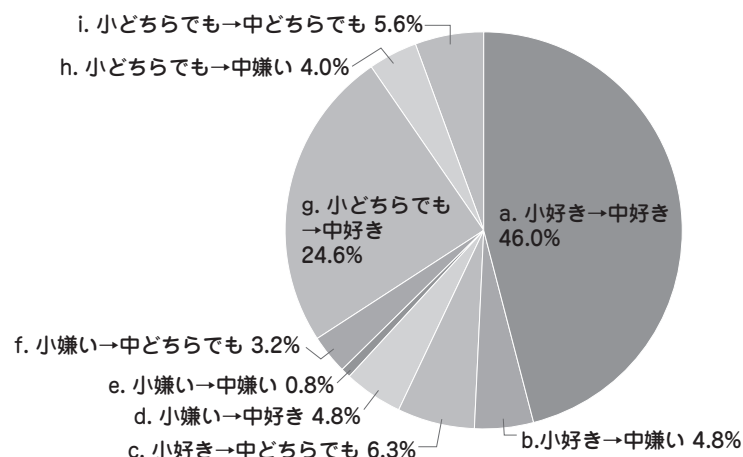


\* 小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のうち、「現在の英語の好き嫌い」を「嫌い」と回答した生徒のみ対象(小学生時または中学生時の好き嫌いが無答不明の場合を除く)。

図2-9は高校入学前ではなく、高校に入ってから英語が最初は好きだったものの、途中で嫌いになってしまった生徒の情意的変化について示している。小中と英語が好きであった生徒が46.0%(a)と半数近くにおよび、小学校ではどちらでもなかったが、中学校で好きになった生徒がさらに24.6%(g)いることから、実に70.6%の生徒が肯定的な状態で高校に入ってきたことがわかる。これらの生徒は図2-6でみたように、能力的には高校時に「好き」と答えた生徒より、低い段階にあり、高校で情意的つまずきを覚えたことによる、高校

## 日本の高校生の英語学習

図2-9 高校時に英語学習が「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」と答えた生徒の情意変化 (n=126)

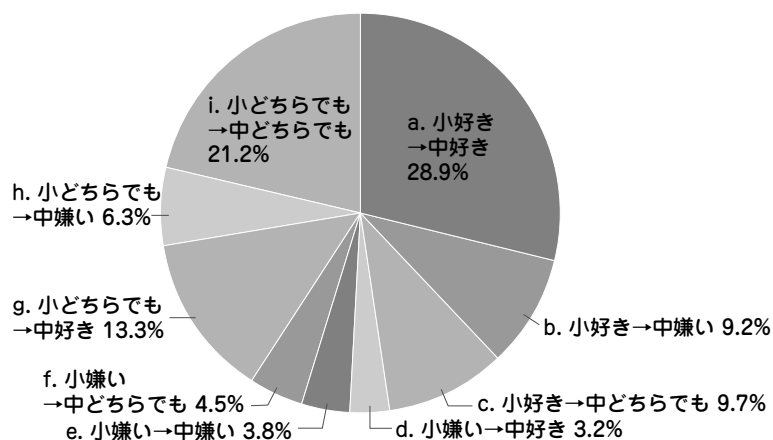


\* 小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のうち、「現在の英語の好き嫌い」を「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」と回答した生徒のみ対象（小学生時または中学生時の好き嫌いが無答不明の場合を除く）。

での学習への否定的な影響がうかがえる。

同じく能力的には中位であった「どちらでもない」と答えた生徒の情意的変化を、図2-10に示す。小学生時には英語が好きだったと答えた生徒(a,b,c)が47.8%いることがわかる。これに、小学生時はどちらでもなかったが、中学から好きになった生徒(g) 13.3%を合わせると、61.1%の生徒がいったんは肯定的な態度を持っていたが、後退してしまっているこ

図2-10 高校時に英語学習が「どちらでもない」と答えた生徒の情意変化 (n=852)



\* 小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のうち、「現在の英語の好き嫌い」を「好きでも嫌いでもない」と回答した生徒のみ対象（小学生時または中学生時の好き嫌いが無答不明の場合を除く）。

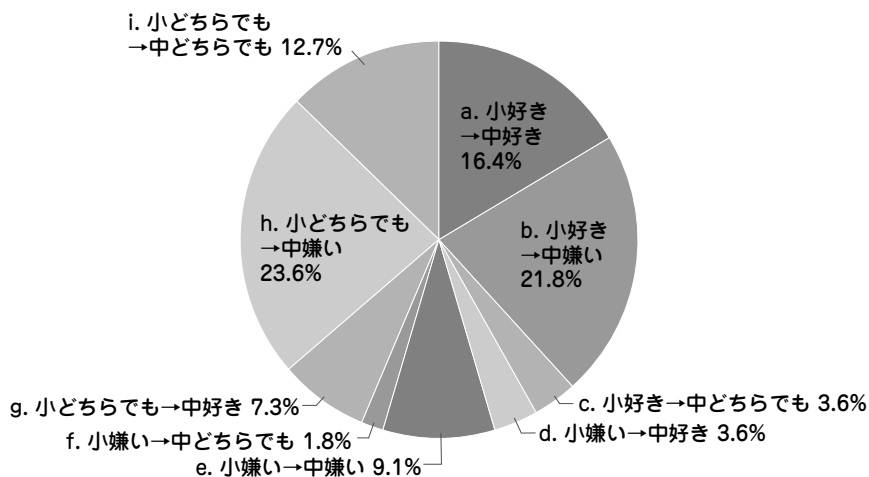


とがわかる。逆に小中高と一貫してどちらでもないと回答した生徒 (i) は21.2%のみであり、多数の生徒は何らかの情意的変化を経験している。「嫌い」といった強い否定的な感情にまではいたっていないようであるが、高校時に「どちらでもない」と答えた生徒の数は全体の40.0%と決して少ない数ではなく、変化の原因を分析した上で、肯定的な感情を保持したり、再度好きになるきっかけが与えられることが望まれる。

最後に、サンプル数が55人と少ないため一般化できないが、高校になって「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」生徒の割合を参考までにみている(図2-11)。45.4%は小学生の時は、好きまたはどちらでもなかったものの、中学に入って嫌いになった生徒 (b,h) であることがわかる。加えて、小中と英語が好きであった生徒 (a) も16.4%おり、高校生になってから好きにさせるためには、小学生の段階で好きになっていることが、重要であることがうかがえる。また、小学生時に英語が好きであると、いったん中学で嫌いになっても高校で再度好きになる可能性があることも示唆された。

最初にみたように、高校時に好きと回答した層は、どちらでもないと回答した層や途中で好きから嫌い、嫌いから好きに変化した層と比べて、能力的に高いことがわかる。高校時に好きと回答した生徒のほとんどが、小学または中学の段階で英語を好きになった生徒であることをみると、高校入学前にいかに英語を好きにさせるかが重要であることがうかがえる。また、高校でどちらでもないと答えた生徒の半数以上は、中学までは

図2-11 高校時に英語学習が「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」と答えた生徒の情意変化 (n=55)



\* 小学生以前に英語学習を経験したと回答した生徒のうち、「現在の英語の好き嫌い」を「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」と回答した生徒のみ対象(小学生時または中学生時の好き嫌いが無答不明の場合を除く)。

## 日本の高校生の英語学習

英語が好きであった層であり、積極的に英語を好きであるという感情をいかに保持するかが課題であると言えよう。

### 3. 能力別および情意別にみた高校時の英語学習への動機づけ

#### 1) 学習動機

それではこのような高校段階での情意的な差は、具体的にはどのようなことを意味するのであろうか。その問いに答えるため、英語学習への動機づけに関する項目への回答を、能力別および情意別にみてみたい。

今回の調査では、英語学習への学習動機を大きくB1～B5の5つのタイプに分類して実施した。B1の「友好動機」は英語を使ってコミュニケーションを取りたい、または英語を話す人たちと知り合いや友だちになりたいといったタイプの動機である。B2およびB3はどちらも「興味動機」であるが、B2では映画や音楽といった一般的な文化への興味であるのに対し、B3ではより深い言語や文化への興味を持っていることを示している。B4の「社会的承認動機」は英語が使えると社会に出て役に立つからとか、国際的に認められるために必要であるからといった社会的に認められるための功利的な動機である。B5の「状況必然動機」は授業があるからとか、テストがあるからといった勉強をしなくては仕方がない状況に置かれているから学んでいるといった義務的な動機である。

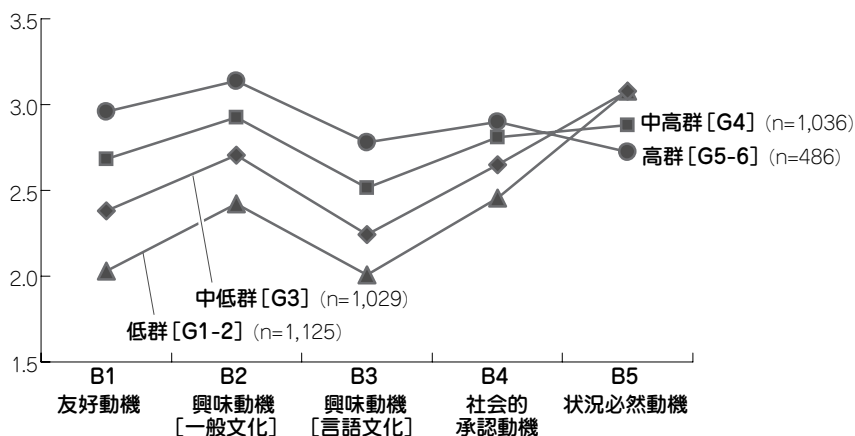
これらの学習動機と能力との関係をもてみると(図2-12)、B5の状況必然動機を除いて、能力が上昇するにつれて、全般的に学習動機も高くなる傾向にあることがわかる。逆にB5の義務的な動機は低スコア層(低群・中低群)ほど高くなっている。高群と低群との差を詳しくみると、低群ではB5の状況必然動機が高い他、B2の一般文化への興味動機やB4の社会的承認動機が高いことがわかる。なんとなく映画や音楽への興味や役に立つだろうといった動機を持っているだけで、B1の友好動機やB3の言語文化への興味は低い状態にある。

高群の特徴としては逆にB1の友好動機やB3の言語文化への動機が高いことが挙げられる。B2の一般文化への興味動機も連動して上昇しているが、B1の友好動機がB4の社会的承認動機を上回り、B3の言語文化への興味も他の動機とほぼ横並びまで上昇している。高群ではこのような英語で交流をしたいといった動機や、広く言語文化や社会を理解したいといった、より実際的なコミュニケーション能力や学習内容と結びついた深い動機を持っていることがわかる。B4のような仕事に役に立つからといった英語を道具としてみた、功利的な動機は能力差に結びつきづらく、B1からB3のような、より内容的な興味を持たせ

ることが学習を促進すると言えるだろう。

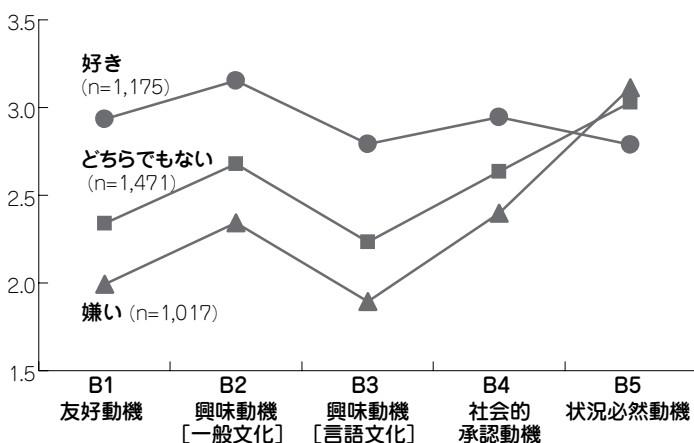
それではこれらの学習動機と英語が好きか嫌いかといった情意との関係はどうであろうか。図2-13に「好き」と「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」を「好き」、「嫌い」と「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」を「嫌い」、「好きでも嫌いでもない」を「どちらでもない」として、情意層別に分析した結果を示す。

図2-12 高校時の英語学習動機×能力層



\* 「あなたの英語学習について」たずねた項目(資料編p.121、項目番号1~11)をB1(友好動機)、B2(興味動機[一般文化])、B3(興味動機[言語文化])、B4(社会的承認動機)、B5(状況必然動機)に分類し、その分類ごとに「全く当てはまらない(1)」~「とても当てはまる(4)」までの4段階で回答してもらったものの平均値を算出した(以下、図2-13まで同様)。

図2-13 高校時の英語学習動機×情意層



\* 「現在の英語学習は好きですか」の質問で、「好き」と「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」を「好き」、「嫌い」と「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」を「嫌い」、「好きでも嫌いでもない」を「どちらでもない」とした。

## 日本の高校生の英語学習

「好き」群は能力層別にみたときの高群と同様の傾向を示し、B1の友好動機に加えて、B3の言語文化への興味動機も高い状態にあることがわかる。逆に「嫌い」群は低群と同様の傾向を示し、B5の状況必然動機が他を上回って高く、残りの動機の中では、B2の一般文化への興味動機やB4の社会的承認動機が高い傾向にある。

それでは「どちらでもない」と答えた生徒はというと、B5の状況必然動機が「嫌い」群と同じくらい高く、他のB1からB4の動機も「嫌い」群と同様のパターンを描いていることがわかる。中学と高校とを比較すると「どちらでもない」と回答する生徒が増え、肯定的な回答が減少していたが、この「どちらでもない」といった回答は、どちらかというとな否定的なニュアンスに近いことが示唆された。学習動機の面からは、より深い内容的な興味を高め、積極的に好きという気持ちを抱かせることが重要であると言えよう。

## 2) 学習意欲・学習行動

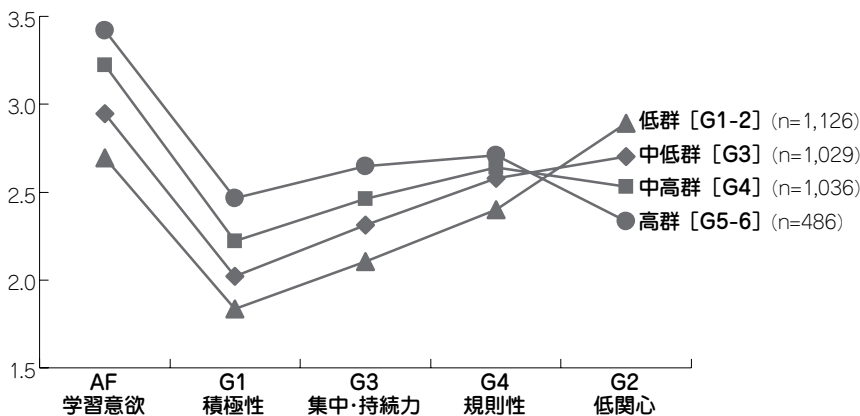
このように学習動機では能力層、情意層別に質的な差異があることがわかったが、実際の英語学習への意欲や行動上ではどのような違いがあるのだろうか。同様の分析を行った結果を以下に示す。

AFの「学習意欲」は、英語の学習や授業で学んでいることが自分にとって重要であるといった英語学習への肯定的な価値観を含んだものであり、広い意味での学習意欲をあらわしている。それに対してG1～G4は学習行動を示しており、G1の「積極性」は進んで学習のための時間や機会を作ろうとしているかどうか、G3の「集中・持続力」は学習に集中や持続して取り組めるか、G4の「規則性」は勉強や課題を規則的に行えるか、G2の「低関心」は逆に他のことに気をひかれてしまったりするかといった傾向を示している。

図2-14からわかるように、学習動機と同様、学習意欲や学習行動は全般的に能力があるにつれて高くなる傾向にある。また、行動面に関しては、G1の積極性、G3の集中・持続力、G4の規則性にかけて値が高くなっていく。ただし、低群ではそれらの値の差が大きいのにに対して、高群ではその差が小さく、積極性や集中・持続力においても比較的高い値を示していることがわかる。

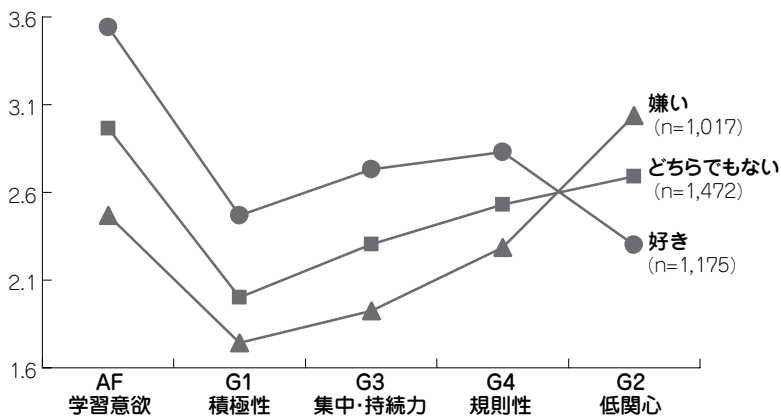
図2-15はこれに対して情意層別にみた結果であるが、「好き」群と「嫌い」群では学習意欲の面で顕著な差がみられる。また、「どちらでもない」群では、学習行動において、G1の積極性の面で「嫌い」群と近く、規則性や集中・持続力はある程度あっても、自分から進んで学習の時間や機会を見つけるまでにはいたっていないようである。

図2-14 高校時の英語学習意欲・行動×能力層



\* 「あなたの英語学習について」たずねた項目(資料編p.121、項目番号12~27)をAF(学習意欲)、G1(積極性)、G3(集中・持続力)、G4(規則性)、G2(低関心)に分類し、その分類ごとに「全く当てはまらない(1)」～「とても当てはまる(4)」までの4段階で回答してもらったものの平均値を算出した(図2-15まで同様)。

図2-15 高校時の英語学習意欲・行動×情意層



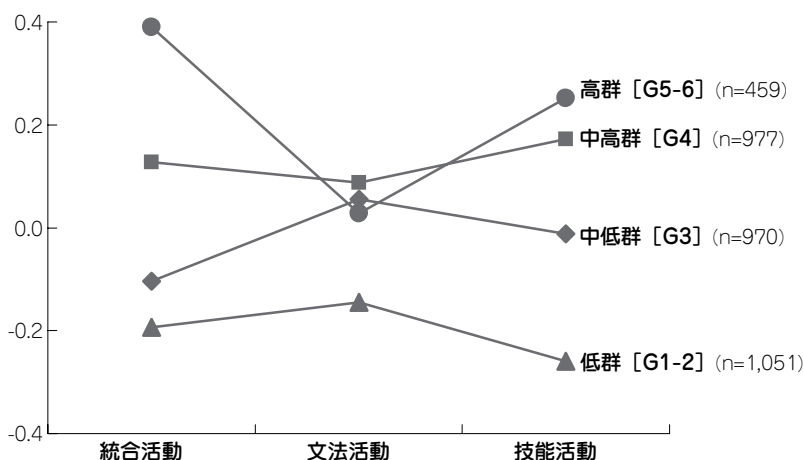
\* 「現在の英語学習は好きですか」の質問で、「好き」と「最初は嫌いだったが、途中から好きになった」を「好き」、「嫌い」と「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」を「嫌い」、「好きでも嫌いでもない」を「どちらでもない」とした。

#### 4. 能力層別にみた教室内学習の認識差

これまで情意差と能力差との関係についての分析結果をもとに考察を進めてきたが、能力差を生み出しているのはこのような情意面の差だけではない。最後にどのような教室学習がこのような能力差を生み出すのか、学習者の認識上の差をもとにみてみたい。

高校に入ってから授業内容に関して、これまでの「東アジア高校英語教育GTEC調査」でも用いた質問項目をもとに、33項目の活動に関して頻度をたずね、因子分析を行った結果、項目は大きく3つのタイプの活動にまとまった。1つめのタイプは「統合活動」であり、「様々

図2-16 高校時の教室内学習認知×能力層



\* 「統合活動」「文法活動」「技能活動」は、「高校に入ってから授業の内容について」たずねた項目を因子分析した結果から、3つの活動タイプにわけたもの。値はそれぞれの活動タイプの平均値である。

な話題について、英語で問題点や原因などを話し合ったり、賛成と反対の立場から議論したりする」、「読んだり聞いたりした内容についての自分の考えを整理して英語で書く」といった、情報をもとに何かを考えてそれをまとめて伝達するといった活動であった。これに対して2つめは「文法活動」であり、「文法や語法に注意して正しく英語で書く」、「英文和訳をする」といった、主に文法をベースとした理解や産出の活動であった。3つめは「技能活動」であり、「音読などによって英語を流暢に声に出す練習をする」、「英語のリズムやイントネーションに注意しながら発音を練習する」といった主に口頭での技能に重きをおいたスキル・トレーニングの活動であった。

これらの活動がどれくらい行われていたかを、因子得点をもとに能力層別にみると(図2-16)、高群では文法活動も他と同じくらい行いつつも、技能活動やとりわけ統合活動の頻度が高く認識されているのが特徴であった。中高群では技能活動は高群と近い値であるものの、統合活動があまり行われておらず、そのことが差につながっていることが推測される。高群や中高群などの高スコア層でも必ずしも文法活動が行われていないわけではなく、それと同等またはそれにも増して統合活動や技能活動といった、よりアカデミックな、またはスキル・トレーニング的な活動が行われていることがわかる。

これに対して、中低群ではさらに技能活動が上位群と比べてさらに低くなり、統合活動の頻度がかなり低い値となっていることがわかる。そして低群では、統合活動だけではなく、文法活動も落ち込み、技能活動もかなり低い値となっている。統合活動が低いのが低

群や中低群などの低スコア層の特徴であり、中低群と低群をわけるのは文法活動や技能活動がそれでもそれなりに行われているかどうかであると言えよう。

## 5. まとめ

学習者は高校に入るまでの段階で様々な情意的変化を経験しており、小学生段階では英語学習に対して肯定的な回答が多く、否定的な回答が少ないのに対して、中学生段階になると、否定的な回答が増えてくる。そして、高校生段階では肯定的な回答が少なくなり、どちらでもないといった回答も含めて、学習者は三分されるようになる。小学生以前に英語学習を経験した層ではやや肯定的な回答が多いものの、中学校または高校の段階で情意的つまづきを覚える学習者の数も多く、必ずしも肯定的な情意が保持されるとは限らない。

高校時に英語が「好き」と答えた学習者は、小中のいずれかの段階で好きになっている可能性が高く、高校になってから英語を好きになる割合は少ない。「嫌い」と答えた学習者では小学生段階から嫌いであった割合も高いが、それにも増して中学で嫌いになった層が多い。また高校で、「最初は好きだったが、途中から嫌いになった」学習者の多くは、高校入学以前の段階では好意的な態度を持っていたものの、何らかのきっかけで嫌いとなってしまったこともわかった。これらの学習者は能力的にもつまづきを覚えていることが多く、悪循環を起こさないように、情意的な改善を図りつつ、技能面での手当てもしていく必要があるだろう。また、小学生の時英語が好きであった場合、中学生でつまづいても、もう一度高校で好きになる可能性があることがみえた。早期の段階で肯定的な情意を育てておくことの長期的な意味を考えていく必要があるだろう。

一般的に高群は情意的にも肯定的な状態にあったが、学習動機の面からより質的に差をみると、能力と情意とともに影響しているのは、友好動機や言語文化への興味動機であった。逆に一般的な文化への興味や社会的承認動機は低群や情意的に低い学習者層でも持ちやすく、内容的に深い動機である友好動機や言語文化への興味動機などを持たせることの重要性が示唆された。

これは教室活動の認知からもうなずける結果であり、スコア高群と低群を分けるのは「文法活動」の有無ではなく、「統合活動」であった。単に文法を身につけさせたり、技能を磨くだけでなく、より深い思考を要求する「統合活動」こそが重要であり、そのためにも内容面に関する深い興味を育てていくことは重要となるだろう。今後定点的に調査を行う中で、情意面および技能面での発達的な変化を追っていくことが期待される。